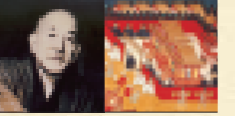


知られざる  
三重にまつわる  
文学・美術を  
紹介します。



当時17歳の小津を中心に友人と設立した映画研究会「エジプトクラブ」のオリジナルスタンプや、映画館から取り寄せたプログラムなど。(小津安二郎青春館蔵)

CHRONICLE OF MIE vol.5 【文学編】

尾西康充 おにしやすみつ  
人文学部・文化学科教授  
専門は日本近代文学

人情の機微を描いた  
映画監督、  
小津安二郎。  
日本を代表する映画監督、小津安二郎。  
パンカラな中学時代を過ごし、  
代用教員を勤めた松阪での日々は  
作品に登場する子どもたちの姿や  
不況にあえぐ日本社会を描いた  
人情喜劇に投影されている。

世界的に名声を博した映画監督の小津安二郎は大正2年(1913)、9歳のときに父虎之助の郷里である三重県松阪に転居した。父は東京都江東区深川で海産問屋を営んでいたが、近くに建てられたセメント工場による健康被害を避けるために、安二郎を転居させたといわれている。

小津は松阪市立第二尋常小学校を卒業した後、県立宇治山田中等学校(県立宇治山田高等学校)に入学した。このとき3学年下には、後に松阪市長になる梅川文男が在籍していた。梅川によれば、小津は毎朝通学する汽車のなかで「停学ものである煙草をふかし、上衣の上ボタン二つほどはずした」姿で、下級生たちを車内に集めて活弁を聞かせていた。週末に名古屋や大阪まで出かけて行って覚えた活弁は「かけ値なしにうまかった」という。柔道では教師の師範代として下級生を次々と投げ飛ばす腕を持っていた一方、寄宿舎では下級生にぜんざいをふるまうという気の優しい面もあった。

だがパンカラ中学生であった小津は寄宿舎を追い出され、自宅から汽車通学をさせられることになった。愛宕町の自宅近くには映画館の神楽座があり、小津は一層映画にのめり込んでいった。

大正11年(1922)、三重師範学校(三重大学教育学部)の受験に失敗、松阪市飯高町にある宮前尋常小学校に1年間代用教員として勤務した。小津作品の中に登場する、子どもたちが清流で鮎釣りをしているシーン、櫛田川の上流にある宮前で児童と過ごした代用教員時代の思い出にもとづいて

撮影されているという。かつての教え子たちは、小津の映画に子どもが登場するたびに、自分の姿が描かれていると感じ、作品に親しみを覚えた。

翌年、上京して松竹映画会社に入った小津は生涯を通じて、映画界以外の社会で働いたのは、宮前での1年間だけで、皮肉なことに三重師範学校の不合格が後の大きな成功を導いたといえる。小津には松阪の町を舞台にした作品はないが、死の病床で、見舞いに訪れた梅川に対して、ぜひ一本撮りたいと語った。



(小津ハマ氏蔵)

小津 安二郎 おづ やすじろう

映画監督

1903年～1963年

明治36年(1903)12月12日～昭和38年(1963)12月12日、享年60。映画監督。9歳から19歳までの足かけ10年間を三重県で過ごす。代表作には「東京物語」(昭和28年/1953、松竹)や「秋刀魚の味」(昭和37年/1962、松阪)などがある。

小津は映画の中で中産階級の家をとりあげることが多かった。しかし戦前は『大学は出たけれど』(昭和4年/1929)や『落第

はしたけれど』(昭和5年/1930)、『生まれてはみたけれど』(昭和7年/1932)など、世界恐慌の影響を受けて不況にあえぐ日本社会を描いた映画を数本制作している。サイレントの人情喜劇『出来ごころ』(昭和8年/1933)では、ビール会社の職工喜八が演芸場からの帰りに、製糸工場を蹴首された春江に出会い、行きつけの大衆食堂に頼み込んで彼女を働かせてもらう。息子富夫が病気になるって危篤におちいると、喜八は医師を呼んで懸命に看病するが、治療費が払えないことを知ると、「北海道根室ヤマヤ漁場」で働く「人夫募集」に応じる。一度は北海道に向かう船に乗るにもかかわらず、息子とは別れがたいことに気づいて、海に飛び込んでしまう。このようなあらすじの『出来ごころ』は、貧乏長屋に住む庶民を描いた人情喜劇の傑作で、作品のクライマックスは小津が小林多喜二の『蟹工船』(昭和4年/1929)に触発されて考案したのだと考えられる。

松阪木綿垣鼻工場争議が発生した大正15年(1926)は(三重県の無産運動のピークの年)といわれる。三重合同労働組合、日本農民組合(日農)県連合会青年部、労働農民党県支部連合会が結成されると、代用教員を務めていた梅川はそれらに参加した。運動の中核を担ったのは、小津と同じ世代の若者たちであった。

もし小津が、「蟹工船ブーム」と呼ばれる昨今の格差社会を見れば、どのような映画を撮影したであろうか。残念ながら、涙まじりに笑い合える温かい喜劇は、今の日本社会にはない。



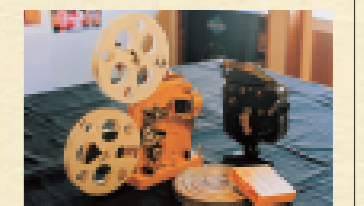
小津安二郎青春館(松阪市)の外観。昭和25年頃の神楽座をイメージしている。



小津安二郎青春館の内観。松阪時代に実際に使用していた机や本棚が展示されている。



宇治山田中学校(第四中学校)時代の教科書とノート。(小津安二郎青春館蔵)



「生まれてはみたけれど」のワンシーンに登場する映写機(同型機)。(小津安二郎青春館蔵)